

アイルランドの幼稚園の音楽教育

帝京短期大学こども教育学科

本多 泰洋

Music Education of Infant Cycle in Ireland

Yasuhiro Honda

Department of Childhood Education, Teikyo Junior College

Abstract : Both Japanese and Irish traditional music have been composed based on same penta tonic scale. Music education curriculum of early childhood in Ireland was studied and discussed difference between Japanese kindergarten and Irish infant cycle.

キーワード : アイルランド、学校教育制度、初等教育、幼児教育、幼稚園、初等教育カリキュラム要領、音楽教育、アイルランド音楽、伝統音楽.

Key words : Ireland, School system, First Level, Infant cycle, Pre-school, Primary School Curriculum, Music education, Irish music, Traditional music.

1. はじめに

アイルランドの音楽は、アイルランド音楽、ゲール音楽、ケルティック音楽など、さまざまに呼ばれることがある。しかし、ゲール音楽と呼ぶ場合には、イギリスのスコットランドに伝わる音楽を指す場合もあり、ケルティック音楽という場合には、フランスのブルターニュ地方などのケルト族の音楽も含み、さらに昨今は商業主義による癒しの音楽の代名詞として使われることもあるなど、本来のケルト族の音楽という意味から乖離して使われることが多い。日本の社会がアイルランドの音楽を受容してきた過程を詳しく分析した高松は、アイルランドの伝統的な音楽は、同一の旋律を奏でるさまざまな奏者や歌手が、即興的にリズムや速度をずらして演奏または唄う（ヘテロフォニー）、旋律の基礎となっている音階を守って曲が作られている（旋法的）、旋律に装飾音を付けて演奏する、などの3つの特徴を持つと報告している¹⁾。なお、ヘテロフォニーは日本の雅楽などでも用いられている奏法である。ここでは、混乱を避けるためにアイルランドの国の音楽という意味で、アイルランドの音楽と呼ぶこととする。

アイルランドの音楽のもう一つの特徴は、五音音階が使われていることである。これは、ド (C)、レ (D)、ミ (E)、ソ (G)、ラ (A) の五音音階で、ヨーロッパの中世の音階、中国の伝統音楽（呂旋法）、日本の雅楽などの伝統音楽（呂音階）、雅楽や声明（呂旋法）、民

謡、演歌（近代以降のヨナ抜き長音階）、箏楽（ミが半音下がった (Eb) の雲井音階）など、日本の伝統音楽や文化の中に広く見られる。同じ五音音階でも、沖縄やインドネシアのガムラン音楽で使われている音階は、ド (C)、ミ (E)、ファ (F)、ソ (G)、シ (B)（琉球音階、近代以降のニロ抜き長音階）である。

この事実に着目して竹下は、アイルランドと日本の青年の音楽認知について検討し、一連の研究結果を報告している^{2)~4)}。竹下によると、日本の20代の青年には、アイルランドの伝統民俗音楽であるジグ（注1）、リール（注2）、シャンノース（注3）を、アイルランドの20代の青年には、日本の伝統音楽である祭囃子、箏曲、民謡、能楽、雅楽をそれぞれ聞かせて、その認知の相違を検討している。その結果、日本とアイルランドの両国の青年とも、アイルランドのダンス音楽のジグやリールは芸術的と、シャンノースは芸術的と認識することを明らかにしている。一方、日本の箏曲、能楽、雅楽は、日本の青年はいずれも芸術的と認識しているが、アイルランドの青年は、わずかに箏曲のみを芸術的と認識している。アイルランドの青年は、雅楽や能楽は、認知枠外の音楽と受けとめている。日本の民謡や祭囃子は、日本の青年は芸術的と認識しているが、アイルランドの青年は、民謡も祭囃子も芸術的でも芸術的でもない、よく分からない音楽として認知していることを報告している。このように、伝統音楽において同じ五音音階を使う日本とアイルランドの音楽の認知が大きく異なる結果が報告されていることが

ら、アイルランドの学校教育における音楽教育の内容を分析、検討することとした。

2. アイルランドの学校教育制度

アイルランド共和国 (Republic of Ireland) の学校教育制度は各国と同様、初等教育 (First Level)、中等教育 (Second Level)、そして高等教育 (Third Level) で構成されている。初等教育は、2年間のインファントサイクル (Infant Cycle、幼児教育) と、6年間のプライマリースクール (Primary School) からなる。幼児教育は、幼稚園 (Pre-school、4～5歳) で、小学校教育は、国民学校 (National school、6～11歳) で実践される。ただし、インファントサイクルは義務教育ではない⁵⁾。

中等教育は、日本の中学校に相当する3年間の前期課程ジュニアサイクル (Junior Cycle、12～14歳) と、日本の高等学校に相当する2年間の後期課程シニアサイクル (Senior Cycle、16～17歳) とで構成されている。ジュニアサイクル修了時には、国が実施する全国統一の修了証明試験 (The Junior Certificate examination、ジュニア・サート) を受けて合格しなければ、上級学校に進学できない。ジュニアサイクル修了後の1年間は、トランジットイヤー (Transition Year、15歳) と呼ばれるグループ学習や自由研究、ボランティア活動やコミュニティーワーク、企業でのインターンシップによる仕事の体験を積むなどの移行期間を過ごし、人間形成と将来の進路を熟慮するためのアイルランド独特の制度による期間を過ごす⁶⁾。トランジットイヤーを終了すると、シニアサイクルに進学する⁷⁾。シニアサイクルの修了時にも、国が実施する大学 (University) や教育大学 (College of Education) に進学するための全国統一の修了証明試験 (The established Leaving Certificate、リービング・サート)、または、職業専門大学 (College of Technology) などへの進学のための修了証明試験 (The Leaving Certificate Vocational Programme) を受けて合格しなければ修了とは認められない。試験の成績によって、希望する大学などに入学できるかどうかが決まる。なお、生涯教育の一環として、成人のためにシニアサイクル修了証明試験 (The Leaving Certificate Applied Programme) も実施されている。

義務教育期間は、小学校教育 (6歳) から中等教育前期課程のジュニアサイクル終了 (16歳) までの11年間である。授業は9月に開始され、6月に終了する。大学などの授業は5月開始、5月終了で、いずれも3学期制である。教師の給与は国が支出しているため、一部の私立校を除いて公立、私立にかかわらず、インファントサイクルから高等教育までの授業料は無償で

ある。

小学校のナショナル・スクールのほとんどは、教会設立の学校で、教科は、国語、算数、社会、環境及び理科、視覚芸術・音楽・演劇を含む芸術、総合体育、公衆及び個人保健教育である。中等教育は、教会などが設立した私立学校 (Secondary school)、国立の職業専門学校 (Vocational school)、有限教育法人など種々の設立母体が運営するコミュニティ学校 (Community school) 及び総合学校 (Comprehensive school) がある。中等教育の教授教科は、国語及び文学、数学、科学技術、社会・政治及び環境教育、芸術、体育、宗教及び道徳教育、ガイダンス・カウンセリング・司教の8教科である。

3. アイルランドの初等教育カリキュラム要領

アイルランドの初等教育は前節で述べたように、2年間のインファントサイクルと、6年間の小学校教育からなる。初等教育における教育内容は、各教科ごとの教育指針とともに初等教育カリキュラム要領 (Primary School Curriculum、以下、「カリキュラム要領」と呼ぶ。) に示されている。日本の小学校学習指導要領と異なるのは、内容が具体的で詳細なことである。また、芸術教育 (Arts Education) に関しては、その内容別に、視覚芸術 (Visual arts)、音楽、演劇 (Drama) のカリキュラム要領が示されている。なお、舞踊 (Dance) は、体育教育カリキュラム要領の一部として扱われている。1999年に教育科学省が音楽教育カリキュラム要領⁸⁾ を制定しており、これにより教育内容を検討した。また、別に教師用のガイドラインも出されているが、教育方法が主体となっているため、本稿の参考には使用しなかった⁹⁾。

4. アイルランドの初等教育音楽カリキュラム要領

初等教育の全96頁の音楽教育カリキュラム要領は、序論12頁、幼稚園 (Infant classes) 12頁、1～2学年16頁、3～4学年18頁、5～6学年20頁、成績評価5頁、参考付録として用語が3頁、カリキュラム要領委員会委員などの名簿が2頁とで構成されている。

12頁の序論は、芸術教育の各カリキュラム要領の役割と位置付け2頁、芸術教育の目標の概説1頁、音楽教育の序論9頁である。

9頁の音楽教育の序論では、音楽教育の役割や目的が約1頁、音楽カリキュラムの内容の概説が約6頁、音楽教育の目標が1頁、音楽教育の広い目的が1頁からなる。

序論の、音楽教育の役割や目的の項では、音楽は、人間の自然な発露であり、一生を通じてイメージーションや感性、創作力や冒険、楽しみなどの幸福感を

もたらず。また、こども一人ひとりの能力や感性が違うので個性を尊重しながら教育すると同時に、こどもの間の類似性や協働、集中、統制も音楽教育には重要で、こどもの個性と類似性のバランスをとりながら、さまざまな方法によって音楽の知識や技能、音楽に対する姿勢、音楽による感動や感性を養うと説いている。音楽教育は、長期記憶や短期記憶を発達させ、精神的イメージが增強されるので、全教科学習において問題解決能力を増強し、楽器などの協働演奏や繊細な動きにより、自己統制や自己表現力、並びに筋力を養うと、教育科学的効果にも言及している。さらに、アイルランド音楽は、現代に生きる最も優れた伝統音楽の一つであり、こどもは伝統音楽の教育を通じてその知識や、他者の歴史、文化、伝統を理解する力（他者理解力）を促すとしている。

音楽カリキュラムの内容の概説は、音楽教育の教育内容、音楽の要素、積極的な音楽作り、順序・広がり・深さ、教材の選択、学校の音楽プログラム、評価、統合、言語、情報通信技術、用語の各項から構成されている。音楽教育の教育内容の項では、鑑賞とその反応、表現、創作の3つの教育について述べている。音楽の要素の項では、こどもたちは音楽の中で音楽の各要素がどのように絡み合っているのかははっきりと認識できないので歌や動きを通じて体得するとしている。積極的な音楽作りの項では、音楽ゲームなどを取り入れて、こどもたちが、楽しい経験を通じて音楽の知識、理解、技能を学習することが大切であると説いている。順序・広がり・深さの項では、カリキュラムは、学習の順序を示し、学習を進めるにしたがってさらに広く、あるいは掘り下げた内容を順次学習するようとしている。教材の選択の項では、こどものこれまでの音楽的な経験によって教材を選択し、特に年少の間はこどもによって学習速度が異なるので、年長になってから理論的な内容を扱うとしている。学校の音楽プログラムの項では、学校や地域での社会的、文化的な機会や、他の教科との連携などによって音楽を学習することを説いている。評価の項では、成績評価も音楽教育の一部であり、カリキュラム要領の最後にある成績評価の項に有用な情報を掲載しているとある。統合の項では、他教科との連携や統合、音楽の専科教員と担任教員の連携などについて述べている。言語の項では、音楽教育でのアイルランド語、英語、他のヨーロッパ言語の使用を奨励している。情報通信技術の項では、インターネットなどの通信情報技術や、各種の音楽媒体の利用などを奨励している。

各学年群のカリキュラム要領は、目次、指導計画、音楽概念の発達、内容で構成されている。指導計画の節は、内容構成と説明、教育内容の要素、順序・広がり

り・深さ、連携と統合の項からなる。

音楽概念の発達の節は、拍子、音長、速度（テンポ）、音高（ピッチ）、音力（強弱）、構造、音質（音色）、構成、様式などの音楽の要素の項の簡単な教育目標からなっている。

内容の節は、鑑賞とその反応、表現、創作の3つの項で構成されている。鑑賞とその反応の項は、音の探検、音楽鑑賞とその反応で、表現の項は、歌唱、音楽知識、楽器の演奏で、創作の項は、即興と創作、お話と録音媒体からなっている。以下に、アイルランドの幼稚園の音楽カリキュラム要領の詳細を示す。

5. アイルランドの幼稚園教育音楽カリキュラム要領

(1) 指導計画

「指導計画」の節の内容について、最初の「内容構成と説明」の項で簡単に説明している。「学年群の教育内容の流れ」の項では、まず、身の回りの機械的な音から学級での声、楽器音、録音した30秒以内の音源などのさまざまな音を聞く。しかし、単に受け身で聞くのではなく、その音を真似てみる、あるいはその音の反応を図に表してみるなどの自ら能動的に活動することを「鑑賞とその反応」で行うよう強調している。「表現」では、こどもが教師の援助なしできちんと活動できるように反復して練習し、簡単な歌のゲームや体を動かす活動を行う。簡単な曲を正しい音高で歌うなどの音楽の技能や、絵や記号などを使ってこどもの知っている単純なリズムの曲を通じて、音楽の知識を身に付ける。同様に、簡単な打楽器を使って一定の拍子で叩くなどにより、音楽の技能と自信を身に付けている。「創作」では、手作りの楽器を含め、こどもが楽器を演奏する機会をもうける。音源による音の微妙な違いの区別を強調し、音楽を聞くことや歌を歌うことを尊重するとしている。

「順序・広がり・深さ」の項では、内容や教材の多様性、全体を考慮したバランス、継続的に活動することの重要性とともに、指導計画に書かれている順序によって活動すること、学年進行によって同じ事を異なった広がりや深さをもって反復して活動することとしている。

「連携と統合」の項では、教科を超えた連携について、「内容」の項の所でそれが必要な箇所注として入れている。

(2) 音楽概念の発達

「音楽概念の発達」の節は、以下に示すように音楽の各要素ごとの簡単な教育目標が掲げられている。

「拍子」：一定の拍子またはビートを表現する。例えば行進、体を軽く叩く、手を叩くなど。

- 「音長」：長い音や短い音を聞きそのパターンを真似る。
- 「速度」：速いリズムとゆっくりしたリズムと、速いメロディーのパターンとゆっくりしたメロディーのパターンの違いを理解し区別する。
- 「音高」：高い音と低い音の違いを理解し区別する。
- 「強弱」：大きな音と小さな音の違いを理解し区別する。
- 「構造」：音の始まりと終わりを区別する。
- 「音色」：色々な音を出す物を探し出して音を出す。
自分が考えた方法によって作り出した音を分類する。
- 「構成」：一つまたはそれ以上の音源の音を聞き反応する。
- 「様式」：異なる様式の音楽を聞き反応する。

(3) 内容の「鑑賞とその反応」

前に述べたように「内容」の節は、「鑑賞とその反応」、「表現」、「創作」で構成されている。「内容」の「鑑賞とその反応」の項はさらに、「音の探検」と「音楽鑑賞とその反応」の2つの小項目に分けて説明している。「音の探検」の項では、「周囲の音」、「声」、「体を叩いて出す音」、「楽器」に分けて説明している。

「音の探検」

<周囲の音>

○周囲の環境からの身近なさまざまな音を聞いたり、当てたりする。

雨音、車のクラクション音、犬の鳴き声、赤ちゃんの泣き声、静寂

○音について言葉で表現し音の種類によって音を分類する

機械、気象、動物、人々

<声>

○話し声と歌声の違いを理解し、色々な方法でその声を使う

ささやき声、話し声、叫び声、アアアの話し声、アアアの歌声、ウウウの声

○異なった声を理解する

こどもと大人の声を区別する、学校の周りの声、ラジオの広告

○選り出された音を擬声語や言葉で表現したり真似したりする

ブルーン、ブルーン（エンジン音）、パカパカ（馬）

<体を叩いて出す音>

○体を叩いて音を出す方法を見つけ出す

足を踏み鳴らす、手を叩く、手の平で叩く

<楽器>

○市販の、あるいは手作りの楽器を使って音を出す

方法を探す

市販のもの：トライアングル、タンバリン、太鼓、チャイム、木琴

手作りのもの：シェイカー、金属製や木製のもの

○市販の、あるいは手作りの楽器を使って色々な技法を試す

太鼓を使って色々な方法で音を作る：色々な方法で叩く、大きい音が出るように叩く、小さな音が出るように叩く

太鼓の色々な部分で音を出す：中央、縁、杵

「音楽鑑賞とその反応」の小項目は、以下のような内容構成である。

○短い曲や曲の抜粋の短い範囲内を聞く

<クラシック音楽からの抜粋>

チャイコフスキーのくるみ割り人形のこんべい糖の精（注4）

ルロイ・アンダーソンのそりすべり（注5）

サンサーンスの動物の謝肉祭の抜粋（注6）

<色々な演奏家>

エリック・ナグラ（注7）、ダニー・ケイ（注8）、ラルフ・ハリス（注9）

<アイルランド音楽>

シャロン・シャノンのイーチ・リトル・シング（注10）

はいどう子馬、小さなこびと（注11）

<ポピュラー音楽>

ビートルズのジョン・レノンとポール・マッカートニー作曲のイエロー・サブマリン（注12）

ガーシュン・キングスレイ作曲のポップコーン（注13）

○音楽の短い断片に対するイメージを体の動きの反応で表現する

手を叩く、スキップする、行進する、波打つ（ウエーブ）

ルイ・アームストロングによるハロー・ドリー（注14）

クロード・ドビッシー作曲の子供の領分からゴリウォッグのケーキウォーク（注15）

○音楽の断片について話し、選択させて色々な方法でその反応を絵で表す

この音楽は、活発な音楽、怖い音楽、面白い音楽など

幸せな気分にしてくれる、怯える、ジャンプしてようだなどと感じる

絵を描く、彩色する

○生または録音した一定のリズムの拍子聞いて自分でもやってみる

行進、手を叩く、拍子をとって足を踏み鳴らす
マイク・オールドフィールド作のポーツマス
(注16)

○速いリズムとゆっくりしたリズムの違いを理解し
表現する

走る速さ、歩く速さ、スキップの速さ

急速に、ゆっくりとリズムを復唱する

速くあるいはゆっくりと録音された音楽

速い音楽：リムスキー・コルサコフの熊蜂の飛
行 (注17)

ゆっくりとした音楽：グリーグの朝 (注18)

○大きな音と小さな音の違いを理解し表現する

ボタンと戸を閉める音、そっと戸を閉じる音

大きな声、小さな声

録音機の音の調節

大きな音あるいは小さな音の録音された音楽

エルガーの行進曲威風堂々1番 (注19)

伝統的なスコットランド歌謡の海のかなたのス
カイ島へ (注20)

○高い音と低い音の違いを理解し表現する

歌声、歌

キーボード楽器の極端な音

○長い音と短い音の様式を聞き反応する

拍手のこだま、足踏みリズムの様式

<連携>

作文：作品について話し記録する

<統合>

視角芸術：図画、絵画－芸術の要素－線、型、形
の認識

体育：ダンスの開発、創造、踊る

理科：エネルギーとカー音

(4) 内容の「表現」

「内容」の節の「表現」の項は、「歌唱」、「音楽知識」、
「楽器の演奏」の3つの小項目に分けて説明している。

「歌唱」

○良く知っている歌や別の音源からのメロディーを
理解し唄う

伝承童謡 (nursery rhyme) や歌

Rainn Ghaeilge (注21)

体を動かすための歌

園庭あるいは街路でのゲームと歌、テレビやラジ
オからの人気のある曲

○反復される短いメロディーを理解して真似し、音
の高さの感覚を発達させる

単純な2音符または3音符の曲や歌のゲーム、音
階名を認識することなく真似して学ぶ

上がったたり下がったり (注22)、チェリーパイ

(注23) (ソ、ミ)

シーソー・マーガレット・ドー (注24)、ロー
ジーはまわる (注25) (ラ、ソ、ミ)

小さなサリーの受け皿 (注26) (ラ、ソ、ミ)

○歌やリズムカルな聖歌を聞いたり、あるいは伴奏
して一定のリズムのビートを表現する

行進、手を叩く、足踏みをして拍子をとる

○歌っている時に高い音から低い音へ、低い音から
高い音へ、音が動くのを表現する

低い音では体をかがめ、高い音では伸びをする

腕の動きとともに見本を見せる

○適切な音の強弱 (大きい音/小さい音) の調節が
必要な歌や伝承童謡

小さい音、子守歌の優しい歌声

大きい音、動作をとともう歌や行進曲のようにエ
ネルギッシュな歌声

「音楽知識」

○示された絵に最も合った音の選択

教師がティンクル・ティンクル、あるいはピー
ス・ポリッジ・ホットとハミングして、こどもた
ちが適切な最も相応しいシンボルとして星、また
はオートミールの入ったボールを選ぶ (注27)

○描かれたシンボルから簡単なリズムの型を理解す
る

こどもに相応しい、猫や豚 (1拍子) と子猫や子
豚 (2分の1拍子) からなる良く知られた型から
単純なリズムの型を選択して、教師が手拍子を打
つ



「楽器の演奏」

○簡単な打楽器の演奏

トライアングルを吊り下げて持ち、棒で叩く

タンバリンを振る

太鼓を叩く

順番に一人でそして二人で演奏する

○歌や伝承童謡、あるいはリズムカルな聖歌ととも
に簡単な手作りや市販の楽器を使う

伝統的な曲 (例えば、5本の太っちょソーセージ
(注28)) を歌う時は、こどもたちはポン (pop)
の言葉の所ではメロディーをかなでることのでき

る楽器でその音を、バン (bang) の言葉の箇所では太鼓を叩いて演奏する

(5) 内容の「創作」

「内容」の節の「創作」の項は、「即興と創作」と「お話と録音媒体」の2つの小項目に分けて説明している。

「即興と創作」

○一人ひとり、あるいはグループで単純な音を作り出す色々な音源から音を選び出す

歌声、体を叩いて音をだす、市販の楽器、手作りの楽器

熊、蛙、妖精を表現する

ゲーム、物語、詩とともに使われる効果音

○音楽の要素の多少の調節をともなう短い単純な曲の一部分を見つけ出して演奏する

速い／遅い (速度)、大きい／小さい (強弱)、長い／短い (リズム)、

始まりと終わりの時を知っている (構造)

小さいゆっくりとした太鼓の音

マクドナルドおじいさん (注29) の歌では、

馬の歌詞の所ではココナツを半分にしたもので一早く短い音

羊の歌詞の所では鳴き声をまねて一小さく

アヒルの歌詞の所では手を叩く一ゆっくりと

牛の歌詞の所ではカウベルで一長い音

○与えられたメロディーの型に即興で答える

唄いながら会話する

お元気ですか? - ええ、元気ですよ、Ceard is ainm duit? - Pad-raig

よく知っている歌や伝承童謡に新しい歌詞を付ける

ヒッコリー、ディッコリー、ドック (注30)

猫が時計に駆け上がる (注31)

私と一緒にみんなで手を叩こう (注32)

「お話と録音媒体」

○自分自身や他のこどもたちの活動について話す

どうしてその楽器を選んだのか

どんな風にその音を作り出したのか

その活動はどんな風に楽しいのか

一番好きなのはどれか

○一つの音や音響効果を記号のようなもので図示する



優雅な音楽



アヒルの泣き声

○電子楽器による録音媒体

学校の施設あるいはこども用の録音機などを使用する

<連携>

鑑賞と反応一音の開発

演奏一楽器の演奏

<統合>

視覚芸術：お絵描き

6. アイルランドの幼稚園音楽教育

アイルランドの幼稚園の音楽教育カリキュラム要領の内容について概観した。序論において、こどもの音楽的な感性は、幼児期の音楽教育で養われ、こどもの生涯の音楽生活を決定すると、幼児期の音楽教育の重要性に言及しているのが大変印象的である。アイルランドでは、幼児教育が初等教育の一環として位置付けられ、カリキュラム要領の内容も系統立っており、また、その内容も、使用する教材や教育方法にまで言及して具体的である。教材として、クラシック音楽、ポピュラー音楽、こども向けのテレビ番組のヒット音楽、遊び歌、伝承童謡、アイルランドの伝統音楽のジグやリール、シャンノース、あるいは聖歌など、多彩な音楽教材を使用するよう奨励していることも注目に値する。教育方法に関しても、教師の学習指導について要点を要領よくおさえた簡潔な説明でアドバイスしているのが理解される。

7. 結論と考察

文化的な交流がなかったにもかかわらず、日本の伝統音楽である雅楽や声明、箏楽や民謡などで使われている五音階が、アイルランドの伝統音楽でも基礎となっている。この共通性に着目した演奏家¹⁰⁾や研究者たちが^{11)~4)}、その問題の推論を提起、あるいは研究成果を報告しているが、両国の五音階の共通性の理由を解明するには至っていない。

そこで、日本と音楽的な共通性を持つアイルランドの音楽が、幼児期にどのような教育内容や教育方法で学習されているのかを知るために、日本の学習指導要領に相当するアイルランドの音楽教育カリキュラム要領の内容を検討した。また、その検討結果は、日本の幼児教育における音楽教育の参考にも資すると考えられる。

日本とアイルランドの幼児教育の相違は、音楽カリキュラムの編成の違いにも現れている。アイルランドでは幼児教育が初等教育の一環として位置付けられているが、日本の幼児教育は、幼児の自主的な「遊び」を中心とした教育内容を柱としているため、日本の小学校の教育内容や教育方法との相違も大きい。した

が、アイルランドの音楽カリキュラム要領と、日本の幼稚園教育要領との違いも大きい。日本の幼稚園教育要領の中で音楽教育に直接言及しているのは、「第2章ねらい及び内容」の「表現」の項の「内容」の第6項に、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」と記述されているのみである¹¹⁾。幼稚園教育要領解説では、「幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わう」ために「音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫する」とあって、その内容の具体的な記述はない¹²⁾。日本の幼稚園教育要領では、教師の環境設定の自由度も大きいといえるが、経験則にとらわれたり、逆に経験則に頼ったり、あるいは教育内容の一般化が難しいなどの問題点もある。

一方、1947年に文部省が試案として作成した保育要領の保育内容の音楽の項では、歌については、長調の音域の広くない旋律の美しく明るい単純な音程の飛躍がない8～16小節の歌を、楽器演奏では、太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、笛、カスタネット、シロホンなどの楽器を、音楽鑑賞では30秒から1分の上品でかつ明朗で律動的な曲をと、行進曲5曲、舞踊曲11曲、描写曲8曲、その他の曲10曲をあげており、この中にはチャイコフスキーのくるみ割り人形こんべい糖の踊り、サン＝サーンスの白鳥なども含まれている。しかし、日本の伝統音楽は含まれていない¹³⁾。戦後まもない1946年3月には、アメリカ教育使節団が来日してその報告書を公表している¹⁴⁾。連合国軍最高総司令部の占領下で作成された保育要領試案は、恐らくアメリカの幼児教育をモデルに作成されたため、アイルランドの音楽カリキュラム要領の内容との酷似がみられるのであろう。しかしその後、1956年の文部省の作成した幼稚園教育要領では、教育内容として6領域の一つとして示された「音楽リズム」では、「望ましい経験」として「歌を歌う」、「歌曲を聞く」、「楽器をひく」、「動きのリズムで表現する」と4項目があげられているが、歌については、具体的な名称はあげられておらず、楽器として具体的な名称があげられているのは「カスタネット、タンブリン、たいこなど」のみである¹⁵⁾。このような教育内容の記述方法は、現在の幼稚園教育要領にまで引き継がれている。

また、アイルランドの幼稚園の音楽教育で使われている音楽教材の多様性についても注目される。日本の幼稚園で、日本の伝統音楽である雅楽や箏曲などを教材として使用しているなどは、仄聞しない。わずかにこども向けに作られた祭囃子や民謡を使うこともあるという程度ではなかろうか。日本のこどもたちは、幼児期ばかりではなく、義務教育や高等教育の期間を通じて、特別活動によるクラブ活動などでの特別な例

を除いて、日本の伝統音楽に接する教育機会は皆無といても過言ではない。日本の伝統音楽の継承は、もっぱら個人の努力のみに頼って行われているのは、家元制度などによる徒弟的な技能伝承の教育制度の弊害ばかりではないと考えられる。また、これは、日本における欧米の楽器や音楽理論の修得についても、幼少期からの個人の努力のみに頼って行われていることは、音楽学校の生徒や学生、自立している演奏家の多くが、幼少期からピアノやヴァイオリンの個人指導や学習をしていたとする場合がほとんどであり、才能教育の視点からみても、十分な機会が与えられていないことは明白である。

翻って、国際教育の観点から考察しても、アイルランドの五音音階による伝統音楽やリバーダンスなどの舞踊が、日本で広い年齢層に受容されているのは、商業主義の影響によるところが大きいとはいえず¹⁾、同じ五音音階の日本の伝統音楽が、アイルランドの音楽教育で使われることがないのは、国の外交政策や伝統音楽の教育に対する方針の影響が大きいのではないかと考える。

引用文献

- 1) 高松晃子、日本の「ケルト」受容に関する一考察－「エンヤ」以後の音楽を中心に－、福井大学教育地域科学部紀要、VI（芸術・体育学 音楽編）、第36巻、pp.53-74、2008年。
- 2) 竹下英二、アイルランド学生のみた日本の伝統音楽、福島大学教育実践研究紀要、第26号、pp.95-102、1994年。
- 3) 竹下英二、日本学生とアイルランド学生における音楽認知の構造、福島大学教育学部論集、第58号、pp.1-8、1995年。
- 4) 竹下英二、民俗音楽認知についての比較の試み－アイルランドと日本の大学生の場合－、福島大学教育学部論集、第60号、pp.15-28、1996年。
- 5) Ireland, World Data on Education, 6th ed., International Bureau of Education, UNESCO, 2006-2007.
- 6) Department of Education and Science, Government of Ireland, Transition Year Programmes-Guidelines for Schools（発行年記載なし）。
- 7) Department of Education and Science, Government of Ireland, The Senior Cycle in Second-Level Schools, April 2004.
- 8) Department of Education and Science, Government of Ireland, Primary School Curriculum, Arts Education, Music, 1999.

- 9) Department of Education and science, Government of Ireland, Primary School Curriculum, Arts Education, Music, Teacher Guidelines, 1999.
- 10) 岩城宏之、オーケストラの職人たち、文春文庫、pp.158-161、2005年。
- 11) 文部科学省、幼稚園教育要領、教育出版、2008年。
- 12) 文部科学省、幼稚園教育要領解説、フレーベル館、2008年。
- 13) 文部省、保育要領（試案）、1947年。
- 14) 村井実、アメリカ教育使節団報告書、講談社学術文庫、1979年。
- 15) 文部省、幼稚園教育要領、1956年。

注記

1. ジグ (Jig) は、踊り手が組になって踊るセット・ダンスではなく、一人で踊るソロダンス用のアイルランドの音楽で、8分の6拍子のダブル・ジグ、8分の9拍子のスリップ・ジグ (ホップ・ジグ)、8分の12拍子のシングル・ジグ (スライド) がある。
2. リール (Reel) は、4分の4拍子のアイルランドの上半身を固定したまま下半身を激しく動かして踊る軽快なダンス音楽で、しばしばフィドル (ヴァイオリン) を使って速い速度で演奏されることが多い。同じフレーズを繰り返し演奏することから、音楽が糸巻きのように回転するから、あるいは激しい踊りでよろめくこともあるから、リールと呼ばれるようになったという。
3. シャンノース (Sean Nós) は、アイルランド語で古い (Sean) 型 (Nós) の意味である。ソロで唄われることが多い音楽で、南部のシャンノースは修飾音が多く、西部のシャンノースは修飾音が少ない。特に古いシャンノースは旋法的である。歌詞は、愛や悲しみ、政治的な反乱や飢饉の時などの歴史上の出来事、子守歌、自然、祈り、あるいはおどけた内容などの歌詞が、アイルランド語、英語、ラテン語、あるいはそれらの組み合わせで唄われる。
4. チャイコフスキー、1840年生まれのロシアの作曲家、バレエ音楽「くるみ割り人形」の第2幕の第14曲、ヴァリアシオンⅡ、こんぺい糖の精、原題は「ドラジェの精の踊り (Danse de la Fée Dragée)」で、1892年作曲の約1分40秒の作品。
5. ルロイ・アンダーソン、1908年生まれのアメリカの作曲家、そりすべり (Sleigh Ride) は1948年の作曲。
6. サン＝サーンス、1838年生まれのフランスの作曲家、1886年作曲の動物の謝肉祭 (Le carnaval des animaux) は、91小節の終曲を含め22小節から74小節の14曲の小曲からなる管弦楽曲、28小節の第13曲白鳥はチェロ独奏曲として広く知られている。
7. エリック・ナグラー (Eric Nagler)、1942年アメリカ・ニューヨーク生まれの演奏家、1968年にカナダのトロントに移住、1984年から1988年にカナダのこども向けテレビ番組The Elephant Showのパーソナリティとして出演、カナダの音楽賞であるジュノー賞 (Juno Award) のこども音楽部門優秀賞 (Best Children's Album) を1986年、1990年、1994年、1995年の4回受賞している。
8. ダニー・ケイ (Danny Kaye)、1913年アメリカ・ニューヨーク生まれの俳優、歌手、コメディアン、米国の多くのこども向けテレビ番組の出演で知られ、1987年死去。
9. ラルフ・ハリス (Rolf Harris)、1930年南オーストラリア州の州都パース生まれの演奏家、歌手、作曲家、1952年に南ロンドンの芸術学校に入学するためにイギリスに渡り、1953年にBBC放送の作品の番組で操り人形とともに漫画を描く10分のコーナーに出演、1960年にTie Me Kangaroo Down, Sportが世界中でヒットしたのをきっかけに多くのこども向けテレビ番組に出演している。
10. シャロン・シャノン (Sharon Shannon)、1968年アイルランドの西のクレア州ルアン生まれの演奏家、歌手、アイルランド音楽を世界各地の音楽と融合した曲を作りイーチ・リトル・シング (Each Little Thing, Diarmuid's March) は、彼女の1997年にリリースしたアルバムタイトルの一つであり、収録されている曲の一つでもある。
11. はいどう子馬 (Trup, Trup, a Chapailin)、小さなこども (A Stor's Storin) は、いずれもゲール語によるアイルランドの童謡である。
12. イエロー・サブマリン (Yellow Submarine)、この曲はポール・マッカートニーがこどもの歌として1966年に作曲、その後こどものアニメ映画「イエロー・サブマリン」のテーマ曲として使用された。
13. ガーシュン・キングスレイ (Gershon Kingsley)、1922年ドイツのポツダム生まれのアメリカの作曲家、電子音楽による歌であるポップコーンは1969年作曲。
14. ルイ・アームストロング (Louis Armstrong)、1901年アメリカ・ルイジアナ州ニュー・オルリンズ生まれのトランペット奏者で、サッチモのニックネームで知られる、彼のトランペット演奏と歌

- によるハロー・ドリィ (Hello Dolly) は人々に広く親しまれている約2分30秒の曲、1971年死去。
15. クロード・アシル・ドビッシィ (Claude Debussy)、1862年生まれのフランスの作曲家、娘のクロード・エマのために1906~08年に作曲した子供の領分 (Children's Corner) は6つの小曲からなり、6番目の曲がゴリウォッグのケーキウォーク (Golliwog's Cakewalk) で約2分45秒の作品。
 16. マイク・オールドフィールド (Mike Oldfield)、1953年イギリスのパークシャー州リーディング生まれの演奏家、作曲家、1976年のポーツマス (Portsmouth) は約2分の作品。
 17. リムスキー・コルサコフ (Rimsky-Korsakov)、1844年生まれのロシアの作曲家、熊蜂の飛行 (Flight of the Bumble Bee) は、1900年初演の歌劇、皇帝サルタンの物語の間奏曲で約1分20秒の作品。
 18. エドヴァルド・ハーゲルupp・グリーグ (Grieg)、1843年生まれのノルウエーの作曲家、ノルウエーの作家イプセンの依頼でペールギュント (Peer Gynt Suite) の演劇に2つの組曲として作曲、朝は、1888年作曲のペールギュント第1組曲の1曲で約3分55秒の作品。
 19. エドワード・ウィリアム・エルガー (Edward William Elgar)、1857年イギリスのウースター近郊のブロードヒース生まれの作曲家、行進曲威風堂々1番 (Pomp and Circumstance Military Marches No. 1) は、1901年の作曲。
 20. 海のかなたのスカイ島へ (Over the Sea to Skye) は、スコットランドの伝統歌謡で、歌詞はハロルド・ボルトン (Harold Boulton, 1859-1935) の作曲。
 21. Rainn Ghaeilgeは、ゲール語 (Ghaeilge) による縄跳びなどのこどもが体を動かすための遊び歌。
 22. 上がったたり下がったり (Suas Sios) は、スコットランドのゲール語によるソとミの2音符のみが使われる、こどもが体を動かすための遊び歌。
 23. チェリーパイ (Cherry Pie) は、1964年オハイオ州アクロン生まれのアメリカのグラム・メタル・バンドであるワラントのリードボーカルで作曲家のジェイニー・レーン (Jani Lane) が、1990年に作曲。
 24. シーソー・マーガレット・ドー (See Saw, Marjorie Daw) は、こどもたちがシーソー遊びをしながら歌う伝承童謡で、1765年頃にロンドンで出版されたマザーグースメロディーの韻をふんだ詩の歌詞が付いている遊び歌。
 25. ロージーはまわる (Ring-A-Ring-A-Rosie, Ring-a-Rosie) は、1947年オランダのハーグで生まれ、1956年にオーストラリアに移住したミュージシャンのフランシスコ・アンリ (Franciscus Henri) が、1993年に英語の伝承童謡を集めて歌ったアルバム「ミスター・ウイスキー：お気に入りの伝承童謡のメドレーNo.4」の3番目の曲として入れられ、このアルバムは1998年に再度リリースされ、大ヒットした。ミスター・ウイスキーは、彼の出演するこども向けテレビ番組のキャラクターとしての名前である。
 26. 小さなサリーの受け皿 (Little Sally Saucer) は、1978年にカナダのトロントで結成されたこども向け音楽番組のトリオ・グループであるシャロン・ルイス・ブラム (Sharon, Lois & Bram) が、1979年に初めてリリースしたバイキング料理 (Smorgasbord) と名付けられたアルバムの最後の曲として収録されている。
 27. ティンクル・ティンクル (Twinkle Twinkle) は、モーツァルト作曲のキラキラ星、あつあつの豆のオートミール (Pease Porridge Hot) は、イギリスの伝承童謡で、日本の「せっせっせ」のように手合わせをし、だんだん速度を上げて歌う。
 28. 5本の太っちょソーセージ (Five fat sausages sitting in the pan) は、イギリスの伝承童謡の10本の太っちょソーセージ (Ten Fat Sausages) のアイルランド版で、イギリス版の最初の歌詞は Ten fat sausages sizzling in a pan, Ten fat sausages sizzling in a pan, One went pop! and the other went bang!, There were eight fat sausages sizzling in a panで、次の歌詞は二本ずつソーセージを減らして唄う。
 29. マクドナルドおじいさん (Old Macdonald) は、飼っている動物の鳴き声をアヒル、牛、犬、豚の順番に次々付け足して唄うイギリスの伝承童謡である。
 30. ヒッコリー、ディッコリー、ドック (Hickory dickory dock) は、時計のカッチン、カッチンという音を表したイギリスの伝承童謡。
 31. 猫が時計に駆け上がる (The (cat) ran up the clock) は、イギリスの伝承童謡。
 32. 私と一緒にみんなで手を叩こう (Let everyone (clap hand) with me) は、イギリスの伝承童謡。

注記の主な参考文献

クラシック音楽については主に(1)を、アイルランドの伝統音楽については(2)~(4)と多数のインターネットの関連サイトを、イギリスの伝承童謡に

については主に（４）及びインターネットの関連サイトを、それぞれ参考とした。

- 1) 標準音楽辞典、音楽之友社、2008年。
- 2) ダイアナ・ブリアー著、守安功訳、アイルランド音楽入門、音楽之友社、2001年。
- 3) 松島まり乃、アイルランドの旅と音楽、晶文社、1999年。
- 4) Wikipedia, English.

(2009年11月30日受理)